



# 再恋

作：風見不武王

---

『再恋』

神経工学研究室

西園寺 正秀 教授

自分の名が書かれた研究室。

入り口脇のリーダーに首からぶら下げたIDカードをかざすと、微かなモーター音を響かせて扉が解錠される。

研究室に入ると何よりもまず僕は、自分の机に設置された端末にパスワードを打ち込んだ。

別室のコンピューター本体への認証が終わるのを待つ間に、雨に濡れた鞆を机の上に放り出し、湿った上着をコートハンガーへと投げ掛ける。

水分を含んで重くなった靴の中で、足の指に冷たくまとわりつく靴下を気にしながらも、僕は、さっそくキーボードを叩き始めた。

〈おはよう、英里〉

〈おはようございます、あなた〉

直ぐさま、妻からの返事が液晶ディスプレイに表示される。自分の研究室での朝の日課となりつつある。

〈今日は雨が強くてまいったよ。雪じゃないだけ、まだマシだけど。靴の中まで濡れてしまって、グチョグチョしてるよ〉

〈大丈夫？ 風邪ひかないでね〉

〈ああ。ところで君の方は、どうだい？ 記憶はだいぶ繋がって来たかな？〉

〈ええ、事故の記憶以外は〉

あの悪夢から四日が経つ。

そうだ。

あの日は僕達にとって、悪夢以外の何ものでもなかった。

小児科医師として総合病院に勤務する妻の英里は、あの日非番だった。

ところが、医師の一人が体調不良を訴えたために、代わりとして急きょ呼び出しがかかったのだった。

そして、病院に向かう英里の身に、あの悲劇は起きた。

信号待ちする英里の乗用車に、大型ダンプカーがノーブレーキで追突したのだ。

車体は、その前に止まっていた大型トラックとの間で紙くずのように潰され、英里は致命的な外傷を負ってしまった。

英里が救急車で搬送された先、それは、偶然にも僕が教授として勤務するS医科大学の付属病院だった。

僕が一報を受けて駆けつけた時には、英里は心肺停止状態に陥ったところで、その時に蘇生措置を行った担当の外科医の口から出た言葉は、僕には到底受け入れ難い、絶望的なものだった。

刻一刻と、確実に英里の命の灯火は小さくなっていく。

時間が無い……。

僕は、考えるまでもなく行動を起こしていた。

僕たち夫婦は、自らが万が一の事態に遭遇した場合に、大学の研究機関に献体する事に決めていた。

献体、つまり医療技術の進歩のために、自らの亡骸を研究機関に提供するという事だ。

その旨を担当医に説明すると、僕は助手を呼び出し、英里を医療実験設備の有る自分の研究室へと運び込む。

頼む、間に合ってくれ！

震える手を叱咤しながら、英里の記憶を記録するための、数十本の針電極を頭皮内に挿入していく。

端末を操作してコンピューターに接続すると、即座に記憶のダウンロードを始めた。

僕の研究……。

それは、脳の中の、記憶に関わる海馬等の機能を、シリコンチップで補うというもので、学会でも発表済みだ。

世界には同様な研究をしている学者や研究機関は数組有るが、僕はすでに有る程度の人体による臨床実験の成果も得ている。

しかしだ、

今回やろうとしているのは、研究の中でも更にその先の領域だった。

心を再構築するという事。

高性能なコンピューター内に、人間の記憶をコピーし、思考回路を再現させ、心を再構築させる。

今、まさに僕が取り組んでいる研究の最先端で、理論上では不可能ではない。

これは世界でも僕だけの研究だが、まだまだ臨床実験には遠く及んでいなかった。

だが、今、僕の英里は死にかけている。

僕に微笑み、

僕に話しかけ、

僕を励まし、

僕の愛を受け入れ、

僕を愛してくれた。

その掛け替えの無い尊い精神が、永遠に失われようとしているのだ。

選択に迷いは無かった。

全てのダウンロードが終わり、コンピューター上で、疑似ニューロンと論理シナプスの構造シミュレーションが始まり、バーチャルな脳が形成されて行く。

そして間もなく、生身の英里は死んだ。

〈事故の記憶は、思い出さない方がいいだろう〉

〈そうね。苦しみや痛み of 記憶は思い出したくないわ〉

〈幸せな記憶だけが有ればいい〉

〈そうね……〉

〈君がいれば僕は幸せだよ〉

〈……〉

液晶モニター上に備え付けられたカメラが、じっと僕を見つめる。

〈さて、そろそろ仕事を始めるかな〉

〈あなた〉

〈なんだい？〉

〈あなたが話しかけてくれないと、私、ひとりぼっちだわ……〉

〈退屈かい？〉

〈……淋しいわ〉

〈そうは言っても、一日中君の話し相手をしているわけにもいかないからなあ〉

〈ごめんなさい……、私、我がままよね……〉

〈いや、僕こそ気が付かなくてすまない。このコンピューターには君以外の何も入れてないから、確かに見る物も無くつまらないだろう〉

〈ネットには繋げないのかしら？〉

〈ネット？ 繋げない事はないけど、ただ、どんなリスクが有るか全く分からないよ〉

〈お願い。眠る事も無く、24時間、無の中で過ごすのは苦痛だわ〉

〈そうか……、分かった。一応、セキュリティも掛かっているから大丈夫だとは思いますが、だが、くれぐれも慎重にね〉

〈ありがとう、あなた〉

僕は、コンピューターをネットに接続すると、英里にしばしの別れを告げ、通常の大学の仕事へと向かった。

助手から緊急の連絡が来たのは、それからわずか2時間後だった。

英里の居るコンピューターにウイルスが入り込んだと言う。

幸い、予めインストールしてあったセキュリティ・プログラムにより大事には至らなかった。

慌てて研究室に戻ると、キーボードをせわしく叩く。

〈英里、大丈夫か？〉

〈……お帰りなさい〉

〈ウイルスが入り込んだそうだが、いったいどうしたんだ？〉

英里は沈黙し、カメラの目が僕を見つめる。

しばしの沈黙の後、英里がようやく話し出す。

〈あなた、覚えてらっしゃいますか？ 私達が出逢った頃の事を〉

〈え？ なんだい？ いきなり〉

〈覚えてらっしゃる？〉

〈あ、ああ〉

僕はカメラを見つめ、頷きながらキーを叩く。

〈あなたはまだ助教授で、私はあなたのゼミの学生だったわ。お世辞にも上手いとは言えない講義だったけど、でも、不器用なりにいつも一生懸命だったあなたの事が気になって、私は、いつの間にかあなたに恋してた〉

〈ふふ……。そうだった。僕は学生を相手にするのが苦手だったからね。いまだに研究に没頭している方が性に合うし。まさか自分のゼミの学生に告白されるとは、正直、思ってもみなかったよ〉

〈あの時のあなた、しどろもどろで、とっても可愛かったわ〉

〈おいおい、可愛かったなんて、やめてくれよ。学生を教える身だし、最初はからかわれているのかと思ったんだ。立場上、僕なりに苦悩もしたんだよ〉

〈でも、あなたは応えてくれた〉

〈ああ、君の押しに負けた……。と言うか、本当はとても嬉しかったんだ〉

屈託の無い英里の笑顔を思い出すと、ひとりで顔がほころぶ。

〈私、あなたに毎日お弁当を作って行くのが楽しみだったわ〉  
〈学生達に紛れて二人並んで食べるのは、僕としては、ちょっと照れくさかったけどね。でも、お陰で、一人暮らしだった僕の食生活はかなり改善されたっけ〉  
〈勉強は大変だったけれど、あなたと一緒に居る時間は何よりも幸せなひと時だった〉  
〈僕も仕事と恋愛であんなに充実した時を過ごせたのは、初めてだったな〉  
〈そして、あなたの、とっても不器用なプロポーズ。可笑しかったわ。だって、予行練習してたんでしょ？ ゼミ生みんな知ってたわよ〉  
〈いやあ、あれには参ったよ。結局、ゼミ生みんなの前でプロポーズさせられたっけ〉  
〈あなたったら、まるで完熟トマトみたいに真っ赤な顔して、ようやくの事で、『結婚しよう』の一言をくれたわ〉  
〈あれはマジで、恥ずかしかった！〉  
〈でも、嬉しかったわ。とっても〉  
〈ありがとう！プロポーズ受けてくれて〉  
〈いいえ、こちらこそ、ありがとう！プロポーズしてくれて〉  
〈結婚して、子供には恵まれなかったけれど、でも、僕は君が側に居てくれればそれでいい〉  
〈……〉

テンポ良く続いていた会話がいきなり途切れ、沈黙が流れる。

英里の瞳を覗き込むように、視線を画面からカメラに移す。

〈英里？どうした？いきなり、黙ってしまって〉

画面に英里の言葉が、ゆっくりと表示される。

〈あなた……、私を……、あの頃と同じように愛してくれていますか？〉

僕は即座に返答した。

〈もちろんだよ！〉

僕がそう応えた後、英里は心の底からの思いを解き放った。

〈それなら！ 私を、この苦しみから解放して下さい！〉

僕は思わず、英里の瞳を見つめた。

〈え？ど、どういうこと？〉

僕には……、

〈ウイルスは私が入れたの！〉

おそらく分かっていたんだと思う。

〈えっ?! いったいどうして?!〉

いや、分かっていたが……、

〈私を、消して下さい！〉

わざと気付かぬ振りをしていたんだ。

〈それはできない！〉

苦しむ君に……、

〈助けて！ お願い！〉

目を背けて。

〈君を失いたくない！〉

なんて僕は……、

〈お願い……〉

残酷なんだろう。

端末の冷却ファンの音に紛れ、英里のすすり泣く声が、僕には聞こえた。



沈黙のまま数分が過ぎた。

僕は、重く感じる掌をキーボードの上に置いた。

〈英里、覚えているかい？ 僕が風邪で40度の熱を出して寝込んでしまった時の事〉

少し間を置いて、画面に文字が現れる。

〈……ええ〉

〈君は一晩、付きっきりで看病してくれた。そして君は医者のお卵のくせに泣きながら僕に、「死なないで！」って布団の上から抱きついたっけ。

それが妙に滑稽でね、僕はつい笑ってしまって。そしたら君は「何で笑うの!？」って拗ねちゃって。

でも、その時にね、僕は思ったんだ。こんな素敵な女性は世界に一人だけだ。この女性を、僕は一生守りたいって〉

画面の上のレンズの瞳が、じっと見つめる。

〈病院に君が運び込まれた時、僕は、君を救うつもりだった。自分の研究で、君を救えると思ったんだ。でも、結局は君を苦しめる事になってしまった。本当に、すまない……〉

〈……いいえ。あなたの研究はとても素晴らしい意義が有る物だわ。そのお陰で私は、今こうやってあなたとお話出来るんですもの。そしてちゃんと、あなたにお礼とお別れが言えるの。あなた、ありがとう。あなたに出逢えて、私はとても幸せでした〉

〈英里……。僕の方こそ、君が居てくれて、どれだけ幸せだった事か。ありがとう。愛してるよ、心から〉

〈私も、愛してます、永遠に〉

英里の言葉に続いて、点滅で表示される文字。

—— Please, delete me! ——

僕は涙で滲む端末に、英里のシミュレーション・プログラムとデータを消去するコマンドを打ち込んでいく。

〈さようなら、あなた〉

「さようなら、英里。僕の最愛の女性」

僕は、実行キーを押した。

僕の英里は……、

ついに本当に死んでしまった……。

四十九日の法要も無事終わった。親族は解散し、帰途についた。

僕は一人、墓前に戻ると、しばし英里の思い出に浸った。

英里、君が僕のゼミの学生だった頃、いつも僕を見つけると嬉しそうに駆け寄って来て、笑顔で飛びつくように腕を組んだよね。

結婚してからも、いつも必ず僕の左側に並んで腕を組み、嬉しそうに微笑んでいたっけ。

不思議だ……。

君の事を思い出すと、微笑みながら涙が出るよ。

僕はもう一度線香を点すと、墓を後にした。

もうすぐ桜が咲く。そしたらこの墓地の桜並木も、きっと綺麗だろうな。

そう思った時だった。

突然、後ろから風が吹いて来て、僕を軽く前に押し出した。

まるで……、

英里が後ろから駆け来て、いきなり腕を組んだ時みたいに。

僕は自分の左腕を見ながら、ひとり呟いた。

「桜が咲いたら、また来よう。君と腕を組んで歩くために」